

C班 マナスル展望コース

「マナスル回顧紀行」

村山雅美

11月30日(日)曇、12月1日(月)曇

定刻 0735 (以下すべて LT) に羽田を離陸した ANA 141 便で、0850 関空着までは順調ながら、連絡便のネパール航空は果して機器不具合とやらで来ない。初っ端から関空は ANA タワーゲート ホテルに二泊の足止めに旅は始まった。ネパール、国内は航空便の運行信頼度に加えて、昨今のマオイストの動きもいささか不安になる地域の旅ゆえに、予定は変更されるためのものと割りきり、南極仕込みの変わり身の速さで「ケセラセラの旅」となった。

12月2日(火)曇り

1000 頃、「前日便」と表示された RA

412 便(機種 B-757)で関空をたつ。折から機内誌 Shagri-La には“A Silent Hero 宮原巍”が掲載され、我々の旅にはお誂え向きだった。パーサーにカトマンズへの航空図を所望すれば、「これしかない」と中学用の地図帳を持ってきたのには驚いたが、飛行機は 1845 カトマンズに無事着陸した。

ふと思い出したのは五十年前、DC3 はゆらゆらとカトマンズへ向け、カルカッタを発った。カトマンズ盆地へと二千米程のインド国境の丘陵をかすめるように越えて、牛が悠々と草を食む赤土の滑走路に砂塵を上げて着地した。機内は拍手に沸き、草葺きのターミナ



1953年のカトマンズ空港

ルで悠長な入国手続きをしたネパールだった。

今や、街は雑踏と車の騒音の巷、古都の面影を偲ぶすべもない。噂に聞いたマスクをかけた人々の横行を眼にした後、漸く行き着いた静かな宮原経営のホテル ヒマラヤで、標高 1335 m、気温 19 度の快適な夜を迎えた。

12月3日(水) 晴れ

休養の一日は、各自思いのままカトマンズを楽しんだ。世界遺産 Hanumn-dhoka Durbar (1580 m) を訪れる者もいた。

マナスル登山隊の根拠地として提供されたスシュマさんの実家の屋敷は、先年訪れた時にはロシア図書館として面影を残していた。昔、シェルパがテントで寝泊りをしていた雑木に囲まれた裏庭が僅かに往時を偲ぶよすがという変りようだ。

1947 年インドの独立と共に反ラナ



1954 年、左端はバベ（ニックネーム）。現在は中国大使。

運動の激化、1950 年の王政復古後直後のネパールは政情不安な時期ながらも、一握りの富裕階層の公達と思われる若者を魅了させたのは同じ肌色の日本人の登山隊の渡来だった。シェルパが手馴れた所作で用意した食卓につく我々は、食卓を遠巻きにして見物する若者の熱い視線の的となっていた。その中にひと際利発そうな少年がいた。彼はバベ（ベイビー）と呼ばれる可愛い少年だったが、今は中国大使として北京に駐在中で会えず残念だった。立派な英語と目立つ風貌の青年、ローク・ダルシャンもいた。食後、臆せず新日本憲法の「戦争放棄」についての質問には、さすがの田口二郎さんも応答に苦労したものだ。後に彼は佐藤達夫、金森徳次郎両博士に師事して、当時のネパール国憲法であった君主制的間接君主制憲法と言うややこしいものをたたき台として、明治憲法、マッカーサ

一憲法などを学んだ。彼の叡知に感動された佐藤先生は「ネパールの伊藤博文」という随想を著わされている。

ネパールといえばヒマラヤ登山だが、1949 年スイス、アメリカ隊の入国許可に始まったばかりだった。1952 年といえば、私の年代は「上海帰りのリル」と「芸者ワルツ」でドロク

飲んでいた頃だ。その5月に日本は独立を回復したとはいえ、ヒマラヤなどは夢の世界だった。しかし執拗にヒマラヤを狙っていた京都大学はネパール入国の手段として1952年1月、インド学術会議に出席した。木原・西堀先生がヒマラヤへの門を叩く時がきた。

1951年ニューデリーのアジア陸上競技大会以来の毎日新聞の竹節記者とネパールの選手代表だったクリシュナとの交友を西堀は思いだした。見事に竹節を紹介者に立てクリシュナ(後に日本山岳会名誉会員)を通じて、ネパール入国許可を取り付けた。彼は戦後初の入国許可を得た日本人となった。マナスルには既に仏、西蘭が申請済みと知ったクリシュナは、最後の手段はトップダウンのみとの判断は早かった。体育協会の仲間であり代々王家に仕える家柄であるばかりか、当時マヘンドラ国王秘書官であったダルシャンに西堀を引き合わせた。西堀の外交術は、国王からまさかの勅許を1952~3年京大の生物誌研究会宛にマンマと取り付けた。しかし宛名の誤りと当時の通信状況の中、後光がさすようだったという一枚の紙切れが今西の手に渡ったのは1952年3月のことだった。事は大ごと、一大学山岳会には過ぎた大仕事と考えた今西の複雑な気持ちを今や知る由もないが、4月6日にはJACへ禅譲されていた。

1952年の偵察隊に続き、1953年の本隊員の選考は53年の1月になっていた。JAC会長松方は頂上を目指す実働部隊の主力を34~24歳の村山、山

田、加藤(喜)、村木、山崎、石坂とし、登攀リーダーに戦中アルプスで腕を磨いた田口、高木、医者に辰沼、科学班に中尾、川喜多、隊長三田、副隊長格に加藤(泰安)を選んだ。幸運にも輸送と渉外を仰せ付かった私は、国家的事業であり、経済界の偉いさんの懇請とあって、それを理由に渋る奉職先からの許可を得て、1953~55年と三年間に亘りヒマラヤに関わるようになったのである。

1953年隊は惜しくも7750m地点で敗退の帰途、ラルキャ峠付近で虎の威を借りたシェルパは住民を巻き込んで西藏人ポーターとの間で小競り合いを起こした。偶々居合わせた郡長の仲介により収まったものの、この機会を利用して、部落の支配権をもつヘッドラマと然るべきもう一手を打って置けば、翌年のサマ部落民の行動を避け得たかもと慙愧に耐えない私だ。忘れられないその山に囚らずも五十年振りに対面する時が翌日に迫った。

12月4日(木)快晴

9N-AEL/AEY(川崎重工製BK117)の二機は0815カトマンズ離陸。マナスル遠征時代はカトマンズから400人にも達する人夫でキャラバンを仕立てて、二週間余りの旅だった。今なお懐かしいアルガトバザール、ジャガートは何処か、眼下を探し求めるうちに、スリングヒマールを北に見てへりは西進に転じ、ナムルンを経ていよいよマナスル山域に入った。思い出の山容を地図上で確かめる暇もあらばこそ、へりはここがあのロウかと戸惑う



ヘリとミュールを使っでの移動

中、予定に変わらず 45 分の飛行で着いた。標高 3020 m のロウはゴンパの建設中らしい。工事用の電線がもう其処に迫るマナスルを背景に青空を横切り、ロウも現代の波にあらわれる村に成り果てたかと嘆くのは、私達よそ者のエゴだろうか。30 室くらいの僧房がほぼ仕上がっていることから見ると、かなり大きな本堂が建つのだろう。何処から集まったのか大勢の子供に氷砂糖を配っていると、予期もしていなかったミュール(ロバと馬の混血)が用意されていた。200~300 m の高度差を歩いて高度馴化をはかろうと宮原に頼んでおいたが、乗馬とは知らなかった。乗りにくいこと尋常ではない乗馬だった。西部の馬は賢明にも重そうな彼を見るや、首を振って嫌々をしていたとの小堺説もあった。細い木を三本括った橋で馬は足を滑らし、暢ちゃん(=西部)は落馬の破目に遭ったばかりか、馬が彼の上にドウとばかりに転げ落ちてきたとはとんだ災難だった。先年の北満旅行の時だった。

ハルピンのシシカブ屋で椅子がこわれての顛倒に続き、暢ちゃんの体型が話を面白くしてくれるのか、いつも話題の提供者である。

後に草刈がこう言ってきた。「初乗馬夜毎に落馬が 夢枕」

そこで「ドラさんよ ヘリならば 夢どころじゃない イカッタね」

ところで、これが主要街道かと疑う程の悪場が続く。馬はハアハアと息づかいも荒く健気に頑張り、1130 シャラに着く。標高 3336 m。マナスル(8163 m)は全貌を余すところ無く現わし、氷河衰退の感も否定できない。芝地に座りこんでマナスルを指呼の間



ロウにて

にして、持参のカトマンズの日本料理屋「ふる里」の松花堂弁当を開いた。世にも稀なしかも間違いなく最高地点での老人倶楽部の遠足よろしく昼食を楽しませてくれたのも宮原の趣向だった。さすがに「酒は？」の声もなく、雪崩が崩れ落ちる轟音も響かない静けさだ。

その昔、サマのスツパ(ラマの高僧)に踊らされた住民が、何処にボスがいるのか分からない中、満を持してククリを腰に、今や遅しと待ち構えていた。不気味な静けさの中、私はサーダーのギャルセン・ミツチェン、通訳のディリーと三人で、斥候としてサマ部落に乗り込んだ時を思い出していた。

高みの岩に攀じ登るクレイグ、写真

に取り憑かれた人、思い思いに過ごした二時間半、1400 にシャラから再び馬上の人となった。幸運にも天候に恵まれヒマラヤを大観して口々に 1530 帰着。エプソンの GPS の測地では 28°11'N, 83°57'E、標高 3020 m。夕食はグッドアイデアのカップラーメン、ジャガイモ、卵、スープの後、暮れなずむ夕焼けのマナスルを飽きず眺めて、狭いテントに全員寝袋を並べた。しかし窮屈だった。

五十年前にはネパールの東海道といわれながらも、悪路に生死をかけて往来しあって、夫々米、塩を背負ったネパール商人と西藏商人が後を絶たなかった。時にはヤクを連ねた隊商で賑わったブリガンダッキだった。ところが



C班:(後列)

Craig Davis Webster

安井和憲 鈴木淳平 遠藤八十一 練木允雄 吉田光雄 西部暢一

(中列) 宮原巍 村山雅美

(前列) 小堺秀男 小林昭男 草刈信行

今は交易のルートは中国が作った中ネ友好道路による自動車輸送にとって代わっている。プリガンダッキの崖っぶちにしがみつくような複数の集落では、共同利用する小規模水力発電により付加価値をつけたと思われる木製の窓枠などの建材等と西藏の岩塩、パシミアの原毛等の交易を細々と続けているようだ。すっかり寂れてしまったこのあたりでは、その昔、登山隊を阻止して大金をせしめた昔話も、日本隊を追い返した手柄話も伝承されること無く消えてしまったようだ。

変わったのは人ばかりではない。マナスルの双峰は、ファイフェンを今もピー缶色の青空に流しているが、P 29 は明らかなやせ細り容姿はすっかり衰えたように見えた。田口とアンザイレンしてクレバスを避け、時には飛び越えてスキーで滑り降りたマナスル氷河の

末端部を見て驚いた。泰安が残したあの麓酒亭の大分上までに後退した氷河では、スキーどころではないのも温暖化の証しかと寂しい思いだった。

12月5日(金)晴

狭苦しいテントを焙り出されるよう抜け出て、御来光に映えるヒマラヤを堪能して 0950 帰途についた。私を含む幾人かは高度による軽い「ムーンフェイス」になっていた。プリガンダッキの雲を避け、時にはペラが岩壁を叩きそうな、よそでは味わえないスリルたっぷりの飛行もあった。最高 4200 m まで上昇しても U 字形の氷河の稜線を更に高く見上げるほどの山肌を眺め、ヒマラヤならではの景観を満喫し、1030 ポカラに帰着した。1130 ペワ湖を渡し船で渡り、ポカラ随一の閑静なフィッシュテイルに到着、A 班と合流した。因みにポカラの標高は 850 m、



マナスル



フィッシュ テイル ロッジ



サランコットのバーにて

気温は 20 度前後で快適。私は小林、草刈、クレイグと共に、ポカラの東約 50 〳のベグナス湖に近い旧友の加藤光久君の別荘を訪ね、皆の了解を得て泊まった。彼は広島の人で、写真屋と津軽三味線を業とし、かつてタイで僧籍をとっている。彼とは第 15 回青年の船(小生が団長)以来の友人である。

12 月 6 日(土) 晴

1100 フィッシュ テイル ロッジからマチャプチャレの山麓、標高 1580 m、83°56'N 83°56'E、サランコットのホテル アンナプルナ・シェルパへ移動した。サーダーによれば地名に良くあるコットは刑務所の名残とはいえ、山頂のホテルは眺望も快適、キャンプファイヤーの準備も整っていた。夕刻には B 班来着との連絡により早速バーが開

かれた。大ママ古田女史の采配で、地ブランディのククリで早くも盛り上がり、B 班の到着次第バーは渡辺女史を新ママにと決め到着を待つ。

1900 残念ながら所用で帰国した倉田、向井の両氏を除く全員が、目出度く合流し、カトマンズ以来の無事元気な顔を合わせた。焚き火を囲む盛大な野外パーティとなった。あまりにも天候に恵まれ満点を秘していた C 班は、A・B 班の満足度は如何かと陰ながら心配していただけに全員満ち足りた様子に宮原と喜びあった。

12 月 7 日(日) 快晴

気温 10 度の朝、サランコットからの徒歩組も昼過ぎにポカラに帰着。午後、国際山岳博物館を安藤夫妻の案内で見学。

12 月 8 日(月) 晴

ポカラからカトマンズまで、バスと乗用車に分乗して移動。1600 頃ホテルヒマラヤに到着。

12 月 9 日(火) 晴

1400 日本大使館でお茶の会。2332 RA411 便で帰国の途につく。

12 月 10 日(水) 晴

予定通り関空、羽田に帰着し、明けて 2 月末、宮原君の実家、田沢温泉での再会を約して解散となる。宮原君の行き届いた旅行の計画と実行力、三人のドクターの気配りに感謝すると共に、参加の皆様の御協力には心から御礼申し上げます。では、今度は田沢温泉での再会をたのしみに！

MANASLU 7519,000 Himalayan Map House 尺 1:7

C班
マナスル展望コース



移動手段

